



学校だより

3月号

令和4年2月28日

～ まちのみんな ひとつになあれ ～



「群れ遊び」

学校長 後藤 直樹

今年度を振り返ると、コロナ禍での2年目となりましたが、少しずつ本来の姿を取り戻しつつある1年であったと思います。きっと未来の年表にもしっかりと記載されるであろう世界レベルの出来事の中で、平穏な日々の尊さを改めて実感する日々が続いています。

さて、学校生活の中でこの状況に大きな影響を受けたものの一つに、異年齢交流を目的とした「縦割り活動」があります。学級や学年の枠を外す活動は、ほぼ1年中制約を受けました。成長期の真ただ中である小学生の時期における6歳の差は、かなり大きなものです。身長や運動能力といった目に見える成長はもちろんのこと、心や内面の成長には更に大きな差があります。しかし、この年齢差があればこそ、一つの集団として活動することに大きな意義があると考えます。

ひと昔前は、この異年齢集団が「群れ遊び」の中に自然な形で存在していました。公園や空き地に集まった近所の子どもたちの中で、年上の子が集団をまとめ、今日は「缶蹴り」、飽きたら「おにごっこ」「ボールあそび」と上手にリードしていました。当然、意見が合わずに喧嘩になる場面もあったことでしょう。しかし、それを自分たちで解決していく中で社会性も身に付けていきました。また時には、まだ未就学の弟や妹が加わることもありましたが、例えばおにごっこなら、「〇〇ちゃんはつかまっても鬼はやらなくてもいいよ。」ドッジボールでは「当てられても3回まではセーフでいいよ。」といった特別ルールをつくって、一緒に遊びました。それは戦力外という冷たい意味ではなく、見ているだけではかわいそうという温かい配慮からでした。こうした遊びの中で年上の子は、力の加減や思いやりを学び、年下の子はこのようなリーダーの姿にあこがれ、近い将来の自分の姿と重ね合わせることができました。携帯ゲーム機が出現してから、子どもたちの遊び方は大きく変わりましたが、そんな「群れ遊び」の要素を学校生活の中に取り入れたものがこの「縦割り活動」なのです。

中高一貫校もありますが、6歳という年齢差の子どもたちが一緒に活動できる環境は、小学校だけです。

「縦割り活動」やペア学年による交流は、この異年齢集団の良さを最大に活かしたもので、健全な成長には欠かせない取組であると考えています。令和4年度には、これらの活動も含めて本来の姿となるよう、最善を尽くしていこうという決意を新たにしました。



1・6年生の交流風景